

曖昧さに対するパーソナリティ特性と抑うつとの関連性¹⁾

友野 隆 成²⁾
鹿内 美 冴²⁾

近年我が国では、想定外の大震災・原発事故の発生、長引く景気の低迷、政治不信などが一因となり、現在、そして将来に対する不安が高まっている。これらのことを鑑みると、先行きの見えない曖昧な将来に対して不安をおぼえ、表面上は社会に適応できていても抑うつを感じる者が潜在的に存在することが想定される。よって、現代社会に生きる我々にとって、曖昧さをどのように捉えるかが、その個人の適応に関わってくると言えよう。

そのことに関するパーソナリティ特性を表す概念として、曖昧さへの非寛容 (Intolerance of Ambiguity : IA) が挙げられる。権威主義者は曖昧さに非寛容であることが、Frenkel-Brunswik (1949) によって観察されたことに端を発し、この概念に関する多くの研究が様々な観点から行われてきた。当初は、主に知覚心理学的方法を用いた実験的測定によって検討が行われていた。それらの研究の多くでは、曖昧な刺激呈示後に示される反応速度によって、実験参加者が曖昧さに非寛容であるかどうか測定されていた (例えば、Block & Block, 1951 ; Martin, 1954 ; Millon, 1957など)。しかし、これらの研究で用いられた測定方法の多くの指標間で有意な相関が認められなかったことから、Kenny & Ginsberg (1958) は曖昧さへの非寛容についての様々な定義や測定法間の不一致に関する問題を提起した。

上述の問題を受け、その後はIAを実験法ではなく質問紙法で測定する流れが確立していった。その端緒となったのが、Budner (1962) による研究である。Budnerは曖昧さを“十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類化ができない状態”と定義したうえで、曖昧さに非寛容であることを“曖昧な事態を恐れの原因として知覚 (解釈) する傾向”と再定義した。なお、ここで述べられている曖昧さとは“(1) 手がかりが全くない完全に新しい状況、(2) 手がかりがたくさんありすぎる複雑な状況、(3) 手がかりが異なった事態を招くような矛盾した状況”のことであり、それぞれ“新奇性 (novelty)、複雑性 (complexity)、不可解性 (insolubility)”と名づけられた。さらに、曖昧さに非寛容な者はこれら3つの状況におかれた際に、抑圧、否認、不安、不快、破壊行動、再構築行動、回避行動などを示すと考えられた。そして、Budnerはこの再定義をもとにして、最初のIA尺度であるThe scale of tolerance-intolerance of ambiguityを作

¹⁾ 本研究の一部は、東北心理学会第66回大会・新潟心理学会第49回大会合同大会で発表された。

²⁾ 本研究は、計画立案から分析、論文執筆など研究全般を第一著者が、質問紙の作成・配布・回収およびデータ入力を第二著者が実施した。

成した。この尺度は、 α 係数の値が低いなど信頼性および妥当性に問題があったが、その後の曖昧さへの非寛容尺度開発の呼び水となっていった。

以後、Rydell-Rosen Scale (Rydell & Rosen, 1966), The 20-item ambiguity tolerance test (MacDonald, 1970) などのIA尺度が作成された。しかし、これらの尺度は内的整合性の不十分さ、適切な妥当性の根拠の欠如などが指摘されており (Norton, 1975), 汎用性の高いものとはならなかった。そこでNortonは、Budner (1962) による曖昧さの定義の拡張および上述の尺度の問題点を考慮して、The measure of ambiguity tolerance (MAT-50) を作成した。この尺度は8つの下位カテゴリー（哲学・対人コミュニケーション・公のイメージ・仕事に関連した行動・問題解決・社会的相互作用・習慣・芸術形態）をもつ信頼性と妥当性を兼ね備えた尺度であり、これまで作成されたものの中で最も信頼できるIA尺度と位置づけられている（今川, 1981）。

しかし、MAT-50にも、8つの下位カテゴリー間に低い相関係数の組み合わせがある（中村, 1992）、8つの下位カテゴリーそれぞれの信頼性係数が低い（増田, 1998）、8つの下位カテゴリーを想定した確認的因子分析を行った場合の適合度が低い（友野・橋本, 2003）、などといった統計的な問題点が存在する。これらの問題が示唆することは、MAT-50の8つの下位カテゴリーをそのまま用い、IAを多次元的に捉えることは不適切であるということである。MAT-50が用いられた研究のほとんど（例えば、Andersen & Schwartz, 1992；友野・橋本, 2002；吉川, 1986など）が、8つの下位カテゴリーを用いず全61項目の合計得点でIAを一次的に測定していたものであったことも、MAT-50の統計的不備を裏付ける根拠となる。

そこで友野・橋本（2001）は、最初から曖昧さが生じる領域を対人場面に絞った、「対人場面における曖昧さへの非寛容（Interpersonal Intolerance of Ambiguity : IIA）」を提唱し、MAT-50の問題点を考慮に入れながら、「対人場面における曖昧さへの非寛容尺度（Interpersonal Intolerance of Ambiguity Scale : IIAS）」を作成した。IIASは、「未知の関係における曖昧さへの非寛容」、「一般的な知り合い関係における曖昧さへの非寛容」、「親しい関係における曖昧さへの非寛容」の3つの下位尺度から構成されており、これまでに作成された曖昧さへの非寛容尺度とは一線を画すものである。しかし、信頼性および妥当性が実用に耐えうる程度のものとはならなかった。そのことを受け、友野・橋本（2005a）は、IIASの改訂版である、「改訂版対人場面における曖昧さへの非寛容尺度（Revised Interpersonal Intolerance of Ambiguity Scale : IIAS-R）」を作成した。IIAS-Rは、Budner (1962) によるIAの定義を対人場面に限定し、IIAを“他者との相互作用において生じるあいまいな事態を恐れの原因として知覚（解釈）する傾向”と定義して作成されたものである。下位尺度には「初対面における曖昧さへの非寛容」、「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」、「友人関係における曖昧さへの非寛容」があり、それぞれIIASの下位尺度に対応するものとなった。そして、IIASに比べて一定程度の信頼性と妥当性の向上が見受けられ、IAを対人場面に限定し、一次元で測定するという流れが確立した

のである。

一方, Furnham (1994) によってIAの多次元性が示唆されたことを受け, 西村 (2007) は, 友野・橋本 (2005a) のIIAを含む過去のIA研究が曖昧さへの否定的態度 (Negative Attitudes towards Ambiguity: ATA-N) の一次的測定に偏っていることを指摘した。そして, 西村はこれまでの流れとは一線を画した, 曖昧さへの肯定的態度 (Positive Attitudes towards Ambiguity: ATA-P) も含めたより多次元的な「曖昧さへの態度 (Attitudes towards Ambiguity: ATA)」を提唱し, ATAを測定することが可能である「曖昧さへの態度尺度 (Attitudes towards Ambiguity Scale: ATAS)」を作成した。ここでは, ATA-Nを「曖昧さへの不安」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」の3次元とし, ATA-Pを「曖昧さの享受」と「曖昧さの受容」の2次元とした, 計5次元によるATAの構造が想定されている。

以上のように, IIAとATAがそれぞれ異なる文脈の中で概念化されてきた。そして, IIA (例えば, 友野, 2010; 友野・橋本, 2005b; 友野・橋本, 2006など) とATA (例えば, 岡田・楠見, 2010; 上西, 2010など) のどちらか一方のみを検討対象とした研究がそれぞれ展開されていった。しかし, 両者の関連性について直接検討した研究は, 米田 (2010) や友野 (2011) が見受けられるだけであり, どのような共通点と相違点があるかは現状でははっきりしていない。そこで, 友野・橋本 (2001) および友野・橋本 (2005a) と西村 (2007) をもとに, これまで論じてきた両者の特徴をまとめたものをTable 1に示す。

Table 1 IIAおよびATAの特徴

	IIA(友野・橋本, 2001, 2005a)	ATA(西村, 2007)
肯定的態度の測定	なし	あり(曖昧さの享受・受容)
領域の限定	あり(対人場面)	なし

ところで, 冒頭で述べたことから想定されるように, 曖昧さをどのように捉えるかがその後の抑うつ発生に影響を与えることが考えられる。例えば, Andersen & Schwartz (1992) は, MAT-50を用いて測定されたIAと, ネガティブなライフイベントとの交互作用が抑うつを予測することを示している。また, 友野・橋本 (2005b) は, IIASを用いて測定されたIIAと, 対人関係に関するネガティブなライフイベントとの交互作用が抑うつを予測することを示している。これらの研究は, 認知的脆弱性を持つ個人が持たない個人よりもネガティブなライフイベントを経験した際に, より抑うつに陥りやすいことを仮定した素因ストレスモデル (Metalsky, Halberstadt, & Abramson, 1987; 丹野, 2001) の枠組で検証されたものであり, IAが抑うつに対する認知的脆弱性として機能していることを示唆している。しかし, この2つの研究で用いられたIA尺度は, MAT-50とIIASという, 前述のように信頼性や妥当性に問題が残されているこ

とがこれまで指摘されてきた尺度である。よって、信頼性や妥当性が担保されたIA尺度を用いることで、IAと抑うつとの関連性を再検証する必要があると考えられる。そこで本研究では、IIASの改訂版であるIIAS-Rを用いて、IIAと抑うつとの関連性を検証することを第1の目的とする。IIAS-Rを用いた研究は、IIAとストレス反応との関連性を検討した友野・橋本（2006）や友野（2010）などがあるが、抑うつそのものに特化した研究は見受けられない。そのため、IIAS-Rを用いてIIAを測定し、抑うつとの関連性を直接検討することは意義があるものと考えられる。

一方、ATAと抑うつとの関連性については西村（2007）が検討をしており、ATA-Nの「曖昧さへの不安」と抑うつとの間にのみ正の関連性があることを示唆している。しかし、曖昧さに特化されない全般的な特性不安と抑うつとの間には強い相関関係があることが示唆されている（例えば、松浦・亀山・坂本，2011；田中・佐藤・境・坂野，2007；Tanaka-Matsumi & Kameoka, 1986など）ため、ATASで測定された「曖昧さへの不安」と抑うつとの関連性は疑似相関である可能性も考えられる。また、西村では単純に「曖昧さへの不安」と抑うつとの相関関係を検討したのみで、「曖昧さへの不安」から抑うつへの因果の方向性を仮定した分析については検討されていない。そして、IIAとATAは類似した概念であると考えられるが、どちらがより抑うつに対する認知的脆弱性として機能するかは検討されていない。そこで本研究では、IIAとATAを同時に測定し、抑うつへの影響力を比較することを通して、2つの概念の比較検討を行うことを第2の目的とする。

方法

調査協力者および調査時期

仙台市内の女子大学生を対象に調査を実施し、回答に不備の無かった137名を分析対象とした。平均年齢は18.92歳（SD=0.85歳）であった。調査時期は、2012年5月上旬であった。

測度

ATA 西村（2007）によるATASを用いた。この尺度は、全26項目から構成されており、「曖昧さの享受」7項目（項目例：いろんな可能性がある、すべてを試してみたい）、「曖昧さへの不安」6項目（項目例：はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。）、「曖昧さの受容」5項目（項目例：はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。）、「曖昧さの統制」5項目（項目例：情報がたりないと動きづらいため、できるだけ情報を集めたい。）、「曖昧さの排除」3項目（項目例：どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。）、の5つの下位尺度がある。本研究では、各項目についてそれぞれどの程度あてはまるか「まったくあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（6点）」までの6件法で回答を求め、「曖昧さの享受」と「曖昧さの受容」を合計してATA-P、「曖昧さへの不安」と「曖昧さの統制」を合計してATA-Nとした。

味さの統制」および曖昧さの排除」を合計してATA-Nとして用いた。これらは、曖昧さに対するそれぞれの態度が強いほど得点が高くなるように構成されている。

IIA 友野・橋本 (2005a) によるIIAS-Rを用いた。この尺度は、全17項目から構成されており、「初対面の関係における曖昧さへの非寛容」6項目(項目例:初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます。),「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」6項目(項目例:あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけた時、どう接してよいのかわかりません。),「友人関係における曖昧さへの非寛容」5項目(項目例:友達の買い物に付き合っ物を選ぶ時は、何が欲しいのかははっきりして欲しいです。)の3つの下位尺度がある。本研究では、各項目についてそれぞれどの程度同意するか「とても強く同意しない(1点)」から「とても強く同意する(7点)」までの7件法で回答を求め、全項目の合計得点を算出して用いた。これらは、異なる3つの対人場面ごとに、曖昧さに耐えられないほど得点が高くなるように構成されている。

抑うつ 自己評価式抑うつ性尺度(Self-Rating Depression Scale: SDS; Zung, 1965)の日本語版(福田・小林, 1973)を用いた。この尺度は、全20項目(項目例:気が沈んで憂うつだ)から構成されている。本研究では、各項目について現在どの程度当てはまるか、それぞれ「ほとんどいつも(4点)」から「ない、たまに(1点)」までの4件法で回答を求め、全項目の合計得点を算出して用いた。これは、いま現在抑うつを感じているほど得点が高くなるように構成されている。

実施方法および倫理的配慮

授業時間の一部を利用し、調査を実施した。調査実施に先立ち、配布された質問紙に添付された書面および口頭で本研究の趣旨を説明した。質問紙への回答に同意した調査協力者には、調査参加に対する同意書に署名をしてもらったうえでその場で回答をもらい、授業時間内に提出するよう求めた。回答は約10分程度を要した。また、調査協力者が回答の確認や訂正、本研究の目的や結果に関する問い合わせ、もしくは調査参加の取り止めを求める場合、合理的な範囲でこれらを実行する権利が保証されている旨を、同意書の冒頭文面および口頭で併せて伝えた。なお、回答された質問紙と同意書を、回収後に回答を全て匿名化した後に切り離し、別々に保管した。

結果

各測度の基本統計量および相関係数

Table 2に各測度の平均値、標準偏差、Cronbachの α 係数、および各測度間の相関係数を示す。全ての尺度について α 係数を算出した結果、値は.75～.87の範囲であった。また、IIAとATA-N

との間に中程度の正の相関，SDSとの間に弱い正の相関がそれぞれみられた。しかし，その他の組み合わせには有意な相関はみられなかった³⁾。

Table 2 各測度の基本統計量および相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>	IIA	ATA-P	ATA-N	SDS
IIA	70.12	15.28	.87	—	.023	.430***	.331***
ATA-P	49.32	7.35	.76		—	.003	-.014
ATA-N	59.31	8.14	.77			—	.056
SDS	45.39	6.61	.75				—

IIA=対人場面における曖昧さへの非寛容 ATA-P=曖昧さへの肯定的態度

*** $p < .001$

ATA-N=曖昧さへの否定的態度 SDS=抑うつ

階層的重回帰分析

IIAとATAが抑うつに与える影響を検討するために，SDSを基準変数，IIAとATA-PおよびATA-Nをそれぞれ説明変数とする階層的重回帰分析を行った。分析は，以下の手順で2つ実施された。1つめの分析では，第1ステップでIIA，第2ステップでATA-PおよびATA-Nが投入された。次に，2つめの分析では，1つめの分析で実施された変数の投入順序を入れ替え，第1ステップでATA-PおよびATA-N，第2ステップでIIAが投入された。これらの結果をTable 3に示す。1つめの分析の場合，IIAはSDSに有意な正の影響を与えており ($\beta = .331, p < .001$)，ATAが投入された後もその影響は有意なままであった ($\beta = .376, p < .001$)。しかし，ATA-PおよびATA-NのいずれもSDSには有意な影響を与えていなかった ($\beta = -.022, n.s.$; $\beta = -.106, n.s.$)。一方2つめの分析の場合，ATA-PおよびATA-NはIIA投入前でもSDSに有意な影響を与えておらず ($\beta = -.014, n.s.$; $\beta = -.056, n.s.$)，IIA投入後はIIAのみがSDSに有意な正の影響を与えていた ($\beta = .376, p < .001$)。

³⁾ なお，付加的にATAの5つの下位尺度とSDSとの間の相関係数を算出したところ，西村（2007）同様「曖昧さへの不安」のみがSDSと有意な正の相関を示し ($r = .197, p < .05$)，その他4つの下位尺度とSDSとの間には有意な相関は示されなかった ($r = -.154 \sim .155, n.s.$)。しかし，IIAを制御変数とする，「曖昧さへの不安」とSDSとの間の偏相関係数を算出したところ，両者の関連性は有意ではなくなった ($p = .028, n.s.$)。一方，「曖昧さへの不安」を制御変数とする，IIAとSDSとの間の偏相関係数を算出したところ，両者の関連性は有意であった ($p = .272, p < .01$)。これらのことから，本研究で得られた「曖昧さへの不安」とSDSとの間の関連性は，疑似相関である可能性が示唆される。

Table 3 抑うつ予測に関する階層的重回帰分析結果

	ステップ	投入された変数	β	R^2	ΔR^2
(1)	1	IIA	.331 ***	.109 ***	.109 ***
	2	IIA	.376 ***	.119 ***	.010
		ATA-P	-.022		
		ATA-N	-.106		
(2)	1	ATA-P	-.014	.003	.003
		ATA-N	-.056		
	2	ATA-P	-.022	.119 ***	.116 ***
		ATA-N	-.106		
		IIA	.376 ***		

IIA=対人場面における曖昧さへの非寛容

*** $p < .001$

ATA-P=曖昧さへの肯定的態度 ATA-N=曖昧さへの否定的態度

考察

相関分析の結果、IIAとATA-Nとの間に中程度の有意な正の相関がみられた一方で、IIAとATA-Pとの間には有意な相関がみられなかった。このことは、因子分析の結果IIAとATA-Pが異なる因子に分かれることが示された米田(2010)に通じるものであり、IIAとATA-Pは独立した次元であることが示唆される。また、IIAとSDSとの間に有意な正の相関がみられた一方で、ATA-NおよびATA-PとSDSとの間には有意な相関がみられなかった。このことは、パス解析の結果IIAがストレス反応に正の影響を与えているのに対して、ATAは「曖昧さの受容」のみがストレス反応に弱い正の影響を与えるに過ぎなかったことが示された友野(2011)に通じるものであり、IIAの方がATAと比較して抑うつに親和性があるパーソナリティ特性であることが示唆される。

階層的重回帰分析の結果、IIAはATAの投入の有無に関わらず抑うつに有意な正の影響を与えていたのに対し、ATAはATA-PとATA-Nのいずれにおいても、IIAの投入の有無に関わらず抑うつに有意な影響を与えていなかった。このことは、上述の相関分析の結果の延長線上にあるものであり、ATAに比べてIIAの方が抑うつに脆弱要因としてより妥当であることを示唆している。対人関係に関する脆弱性を持つ個人が持たない個人よりも、より抑うつに陥りやすいという報告(高比良, 2000)もあり、対人場面という限定された状況に対しての曖昧さに耐えられ

ないということが、状況が限定されていない曖昧さに対してどのような態度を持つかということよりも、より抑うつと結びつきやすいのかもしれない。そのことを説明する根拠として、曖昧な状況の抽象度の違いによる測定精度の問題が挙げられる。西村（2007）はATASを作成する際に、場面の抽象度を高めた内容の項目を選定した。このことから、領域を限定せず曖昧な状況の抽象度が高い測定は投影法的なものになってしまい、想定した曖昧さが回答者によって異なってしまったために、抑うつに対する影響が示されなかったのかもしれない。一方、IIAS-R（友野・橋本，2005a）は対人場面で生じる曖昧さという比較的回答者にもイメージしやすい抽象度の低い状況設定であったため、抑うつに対する影響が示されたのかもしれない。

ところで、抑うつの発症については性差が存在することが示されている。例えば、Nolen-Hoeksema（1987）は、抑うつの生起に関する理論的、実証的な先行研究のレビューを行い、反応スタイルに性差があることを見出し、男性よりも女性の方が抑うつに陥りやすいことを示唆している。さらに、日本母性衛生学会（2003）によると、本邦においても、男性に比べて女性の方がうつ病の罹患率が高いことが示されている。また、抑うつの発症のプロセスについても、性差が認められている。例えば、前述した友野・橋本（2005b）は、IIAと対人関係に関するネガティブなライフイベントとの交互作用が抑うつを予測する際に、男性と女性とで交互作用のパターンが大きく異なることを示唆している。これらのことを踏まえると、抑うつとパーソナリティの関連性を検討する際には、性差の存在を念頭に置いた分析が必要となってくるように思われる。しかし、本研究は女子大学生のみを対象とし、男子大学生については検討しなかったため、今後比較検討を行う必要があると考えられる。

最後に、性差の検討以外の課題を述べる。本研究は1時点での測定のみを横断調査であったため、因果関係の言及はできず、結果の一般化には慎重にならなくてはいけない。今後は、男子大学生も含めた縦断調査の実施が必要であると考えられる。そのことにより、先行研究で示されていたような性差がIIAおよびATAと抑うつとの間の関連性においても存在するか否か、そして、抑うつの先行要因としてIIAおよびATAが機能しているかどうかが明らかになるだろう。また、他の年齢層を対象にした縦断調査を実施することにより、本研究で得られた知見が女子大学生特有のものであるか否かも明らかになるであろう。

引用文献

- Andersen, S. M., & Schwartz, A. H. (1992). Intolerance of ambiguity and depression : A cognitive vulnerability factor linked to hopelessness. *Social Cognition*, **10**, 271-298.
- Block, J., & Block, J. (1951). An investigation of the relationship between intolerance of ambiguity and ethnocentrism. *Journal of Personality*, **19**, 303-319.
- Budner, S. (1962). Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, **30**, 29-50.
- Frenkel-Brunswik, E. (1949). Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, **18**, 108-143.

- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Furnham, A. (1994). A content, correlational and factor analytic study of four tolerance of ambiguity questionnaires. *Personality and Individual Differences*, **16**, 403-410.
- 今川民雄 (1981). Ambiguity Tolerance Scaleの構成 (1) 一項目分析と信頼性について— 北海道教育大学紀要, 第一部C, 教育科学編, **32**, 79-93.
- Kenny, D. T., & Ginsberg, R. (1958). The specificity of intolerance of ambiguity measures. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **56**, 300-304.
- MacDonald, A. P. (1970). Revised scale for ambiguity tolerance : Reliability and validity. *Psychological Reports*, **26**, 791-798.
- Martin, B. (1954). Intolerance of ambiguity in interpersonal and perceptual behavior. *Journal of Personality*, **22**, 499-503.
- 増田真也 (1998). 曖昧さに対する耐性が心理的ストレスの評価過程に及ぼす影響 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), **47**, 151-163.
- 松浦隆信・亀山晶子・坂本真士 (2011). 過度な注意の持続と不安・抑うつとの関連—不安と抑うつの識別を考慮に入れた検討 パーソナリティ研究, **20**, 32-40.
- Metalsky, G. I., Halberstadt, L. J., & Abramson, L. Y. (1987). Vulnerability to depressive mood reactions : Toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 386-393.
- Millon, T. (1957). Authoritarianism, intolerance of ambiguity, and rigidity under ego and task-involving conditions. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **55**, 29-33.
- 中村知靖 (1992). あいまいさに対する耐性尺度を吟味する—グループ主軸法 渡部洋 (編) 心理・教育のための多変量解析法入門事例編 福村出版 pp. 47-70.
- 日本母性衛生学会 (2003). ウィメンズヘルズ辞典—女性のからだところガイド— 中央法規出版株式会社
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性ととの比較を通して パーソナリティ研究, **15**, 183-194.
- Nolen-Hoeksema, S. (1987). Sex differences in unipolar depression : Evidence and theory. *Psychological Bulletin*, **101**, 259-282.
- Norton, R. W. (1975). Measurement of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment*, **39**, 607-619.
- 岡田安功・楠見 孝 (2010). 曖昧性耐性と文脈情報の利用がアイロニー理解に及ぼす影響 日本社会心理学会第51回大会発表論文集, 440-441.
- Rydell, S. T., & Rosen, E. (1966). Measurement and some correlates of need-cognition. *Psychological Reports*, **19**, 139-165.
- 高比良美詠子 (2000). 抑うつのホープレスネス理論における領域一致仮説の検討 心理学研究, **71**, 197-204.
- Tanaka-Matsumi, J., & Kameoka, V. A. (1986). Reliabilities and concurrent validities of popular self-report measures of depression, anxiety, and social desirability. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **54**, 328-333.
- 田中誠一・佐藤 寛・境 泉洋・坂野雄二 (2007). 自己注目と抑うつおよび不安との関連 心理学研究, **78**, 365-371.
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学 認知行動理論の最前線 日本評論社
- 友野隆成 (2010). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容と特性的対人ストレスコーピングおよび精神的健康の関連性 社会心理学研究, **25**, 221-226.
- 友野隆成 (2011). 曖昧さへの態度と対人場面における曖昧さへの非寛容の関連性 日本心理学会第75回大会発表論文集, 965.
- 友野隆成・橋本 宰 (2001). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み 同志社心理, **48**, 1-10.
- 友野隆成・橋本 宰 (2002). あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与

- える影響 性格心理学研究, **11**, 24-34.
- 友野隆成・橋本 宰 (2003). MAT-50日本語版の因子構造について 同志社心理, **50**, 32-36.
- 友野隆成・橋本 宰 (2005a). 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み パーソナリティ研究, **13**, 220-230.
- 友野隆成・橋本 宰 (2005b). 抑うつの素質—ストレス・モデルにおける性差の検討：対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として 健康心理学研究, **18**, 16-24.
- 友野隆成・橋本 宰 (2006). 対人場面におけるあいまいさへの非寛容と精神的健康の関連性について 心理学研究, **77**, 253-260.
- 上西裕之 (2010). 日常生活におけるフォーカシング的態度と曖昧さへの態度の関連—FMS-Rと曖昧さへの態度尺度を用いての検討— 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, **1**, 9-20.
- 米田晃久 (2010). Tolerance of Ambiguityの多次元構造の検討 感情心理学研究, **18**, 176.
- 吉川 茂 (1986). 曖昧さへのトレランス—イントレランスの基本的相違点に関する研究 関西学院大学人文論究, **35**, 94-121.
- Zung, W. W. K. (1965). A Self-Rating Depression Scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

謝辞

本研究は、平成24年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究（B））研究代表者友野隆成、課題番号 24730588）および2011年度宮城学院女子大学特別研究助成「特別研究費」の助成を受けた。調査にご協力いただいた皆様に、感謝申し上げます。

The relationship among personality traits towards ambiguity and depression.

Takanari TOMONO

Misae SHIKANAI

This study examined (1) whether interpersonal intolerance of ambiguity (IIA), as measured by a Revised Interpersonal Intolerance of Ambiguity Scale (IIAS-R) predicted depression and (2) which of the two, IIA and attitudes towards ambiguity (ATA), was effective in predicting depression. The participants were 137 female college students, who completed the IIAS-R, the Attitudes towards Ambiguity Scale (ATAS), and the Self-Rating Depression Scale (SDS). Hierarchical regression analyses showed that IIA predicted depression significantly both when ATA was entered into the regression equation and when it was not and that ATA did not predict depression significantly both when IIA was entered into the regression equation and when it was not. These results suggested that in predicting depression, the levels of abstraction of ambiguous situations played an important role; in particular low abstraction levels of interpersonal ambiguous situations were linked to depression.